

## ア メ リ カ の 幼 児 教 育 の 近 状

勝 部 真 長

アメリカに幼稚園教育が盛んになりだしたのは十九世紀末だといふ。日本の幼稚園の最初は明治九年（一八七六）のお茶の水幼稚園であるから、アメリカも日本も、大体その初まりは同時代であつたらしい。今から約百年前の頃とみてよい。アメリカの幼稚園もフレイベルから始まつた。

フレイベル（一七八二—一八五二）が Kindergarten と名づけた幼児のための特別な学校を創設したのは、彼の郷里チューリンギアのブランデンブルグの山村において一八四〇年頃のことであつた。それから十年間に沢山のキンダーガルテンが建てられたが、プロシヤ文部省は、一八五一年にこれを禁止処分にして、弾圧した。解禁されたのはフレイベルが死んだ翌年のことである。エレノア・ヘールヴァルトが国際幼稚園協会をつくつたのが一八五四年のことで、英国のミカリエス夫人がフレイベル協会をつくつ

たのが一八七四年である。

アメリカに幼稚園教育を持込んだのはフェリックス・アドラーとエミリー・ハンチントンらであるが、教育理論としてフレイベル思想を定着させたのはジョン・デュワイで、彼が一九〇〇年に Elementary School Record を発刊した時である。

日本にフレイベル思想を持込んだのは大正六年頃、倉橋惣三がお茶の水幼稚園で実践し、東京女高師の講義にそれを展開してからである。フレイベルの考え方では、「教育とは対立するものを和解させることにある」という句の示すように、一人の人間の中心にある矛盾対立する要素を和解させ、調和させるところに教育とか教養というもの、意味があるのである。フレイベルには、彼の師のペスタロッチがそうであったと同じ様に、敬虔な宗教感情がその人柄に深く浸透していた。すべての物的なものは、神の創造

的意志の現われであるという見方は彼には常に抜きがたくつきま  
とった。と同時に十九世紀はダーウィンの進化論に大きく影響さ  
れた時代である。フレイベルも「人生は進化の過程である」とい  
い、「教育は、広義において、進化の過程における積極的な醸酵  
の要素たるべきである」といった。しかも教育の目的は「調和あ  
る人柄」を作るにあり、それは「有機的な統一体」としての「神  
と共にある宇宙」を構成する「小宇宙」であるのである。

このようなキリスト教的宗教感情は、今度訪れたアメリカのど  
の幼稚園にも保育所にも感じ取られたし、その濃淡深淺はあつ  
ても、園長はじめ保育者や職員の中に、キリスト教の何らかの信  
仰が秘められてあるのを私は感じた。つまりどこかシーンとした  
静けさ、落ち着きのようなものが学園の空気を支配している。これ  
が日本の幼稚園には欠けているように思う。いつもザワザワと騒  
がしい、俗っぽい雰囲気しか日本の幼稚園にはない。キリスト教  
か仏教系のミッションの幼稚園は別として、一般の幼稚園には一  
貫した静けさ、落ち着き、敬虔さが欠けているように思われる。

パークレーの大学附属児童研究所

この玄関にこの人間発達研究所の創設者のハロルド・E・ジ

ョーンズ博士の写真が掲げられている。二十五歳の若さで死んだとい  
うから天才的な人物だったのであろう。受付で参観者心得ともい  
うべき一枚の紙を渡される。

「参観者は絶体の沈黙を守るべきこと。子どもが遊ぶのを見学し  
てもよいが、クスクス笑いや声をたて、笑ったりしてはいけない。  
幼稚園の中に入っても、なるべくあなた自身を目立ぬように注意  
すること。①庭や教室の中に入らずに、外枠の周辺を歩くこと。

②突っ立っていないで、小さい椅子に腰かけていること。子ども  
の使う椅子を邪魔せぬように。③子どもが質問したら快く答えな  
さい。しかし、それ以上発展しないような答え方で。何をしてい  
ますかと聞かれたら、書きものをしてしていると答えて下さい。園に  
ついての質問は、見学の後に教頭に聞くこと。一般の教師は忙し  
くて一々ご返事できかねます。協力して参加している父兄もまた  
教頭の許可なしにご返事はできません。この研究所で観察したこ  
とは、他所では口外は無用です。子どもやその行為についての論  
議は、あなたの教室以外ではしないでください。

ここに敬虔な静けさ、シーンとした落ち着きが表明されている。こ  
の厳肅さがすべての教育の前提であり、この静けさはわが国の禅  
寺や僧院にみられるものであるが、残念ながら日本の学校、幼稚  
園には欠けているものである。

見学の後、われわれは一室に集まって教頭のハンナ・チン・サ  
ンダース女史と一問一答を行った。女史は中國系の人で、米人と  
結婚している。

問 どういう人間に育てたいとお考えですか。

答 何でも自分で出来るように、自信のある子どもに、そして思  
いやりのある、社会的に協力できて、金や物にひかれぬ人  
間、子どもに自信をつけてやるのが大切。社会性の発達と技能  
と情緒。そして自分が誰であるか（自己同一性・identity）を  
把握させてやること。

問 どういう時に叱りますか。

答 他の子どもをいじめたり、家財道具をこわしたり、乱暴する  
時、他の子の遊びを邪魔したりする時、叱るといふよりもその  
子の注意を他にそらし、向きを変えてやる。つまり保育は、子  
どもが伸びて行くのに、一人一人に必要なポイント（要点・急  
所）を指導してやることです。（これ即ち倉橋先生の誘導保育  
の理論と同じことなり）

問 一斉保育はやりませんか。

答 一斉保育はやらぬが、終りの三十分前に片付けをやらせ、グ  
ループ毎に本を読んで聞かせ、じっと静かにしていられるよう

にパズルをやったりして仕向ける。

問 先生たちの研修は。

答 毎日、終ったあとで、十五分間、その日の保育の問題点を話  
し合う。そして一週間に一度、全教師の話し合いを持つ。

問 モンテッソーリをどう思いますか。

答 モンテッソーリだけでは今日やっていけない。精神分析のフ  
ロイドやピアジェやフレールもデュイイもブルーナーも、皆  
大事です。今やアメリカの教育システムは全部やり直すべき時  
に来ている。今のシステムでは小学校三年までしか有効でな  
い。この学園では両親教育を併用している。今の親たちは子ど  
もの育て方を知らない。週一回、夜、両親教育の会をもち、勉  
強してもらっている。子どもの性的早熟のために、今はその速  
さに学校教育も家庭教育も対応できなくなっている。

問 心身障害児を入れますか。

答 今はいないが前にいた。障害児、遅進児を何程か入れること  
は、今日アメリカの傾向となっている。難聴児か不自由児を一  
人か二人、入れなければならぬと米国では考えるのが一般化  
している。I・Qそのものは疑われてきている。（女史は私に  
「人間発達研究―H・E・ジョーンズ論文・講演集より―」と  
いう本を持って来て下さった。）

ビネー・モンテッソーリ・スクール

(サンフランシスコ・サクラメント街三五七〇番地、校長エベリン・D・ビネー女史、副校長ダニエル・J・ビネー氏)

子どもたちが帰った直後、午後四時に来てほしいという約束に従って、われわれが訪れたのは午後四時であった。ビネー女史の父親が創設者だそうで、女史の夫のダニエル氏が案内説明してくれた。モンテッソーリ方式をとる学園はサンフランシスコ地域だけでも六つぐらいある。シカゴには幼稚園から高校まで一貫してモンテッソーリ方式で経営している学園があるということである。

そもそもモンテッソーリとは何か私は日本を出る時、多少調べてメモにしていた。

マリア・モンテッソーリ(一八七〇—一九五二)はローマ大学医学部で女性で最初に博士号をうけた人である。女医として精神障害の子どもを診察しているうち、教育よりも医学の問題として考え、普通児と障害児とを区別しないで接続して考えようとした最初の人である。彼女も子どものI・Qには疑いを抱いた。彼女はやがて大学に再入学し、人間学的教育学と実験心理学とを勉強した。しかし彼女は現代の心理学がはたして有効性があるかどうか

かを疑っている。彼女の考案した障害児教育の方法や遊具——これを大々的に実験に移す機会は一九〇六年(明治三十九年)にやってきた。ローマの富豪のエドワード・タラモ氏が金を出して「仔鹿の家」を作ってくれたからである。

マリア・モンテッソーリはカトリック信者であり、民主主義者であり(つまり、イタリアのファシズム・ムッソリーニに反対)、医学者として科学の立場に立つものである。従って彼女はブラグマチズム(デュエーイのような)にはなれず、また自然主義者にもなれなかった。彼女は自分の立場を *Spiritual Realism* (精神的実在論)と呼んだ。

「子どもにとって第一の問題は、彼を取りまく直接の環境に適応できるということである」従って、「教師は子どもとその環境に對してよき観察者としての立場をとれる人でなければならぬ」。これまでの学校教育が利用していた子ども同志の「競争心」や「褒賞」と「罰」との感情刺激などは、もう必要ないのである。

モンテッソーリは子ども一人一人の個人的心理よりも社会性をより重視した。モンテッソーリ方式はヨーロッパ各地に広がったが、一九三五にナチス・ドイツはドイツ・モンテッソーリ協会を解散せしめ、翌一九三六年にはイタリア政府もモンテッソーリ学校を禁止した。自由発展の教育理論は、時の権威に抗うものとみ

なされたのであろう。マリアは亡命の旅に登り、米國・インド・オランダ・英國を廻って講演をして歩き、いよいよ彼女の名声は世界的なものとなった。

さてビネー氏の説明を聞こう。

「第一に、子どもはからだだけで覚えるという事です。すべての知識は、触ったり、舌でなめたり、耳で聞いたり、身体感覚を通して得られるという事。第二に、すべての子どもには個人差があり、早く進む子と遅い子と、いろいろあるという事。(この学園では二歳から五歳までを扱い、教師と助手とで二十四名一クラスをみている)。教師の心得としては、①一時・一物主義で、一時に一つの物しか見せてはいけない。②目的は覚えさせることでなく、よく見せること、紹介することである。③赤チャン用語を使わず、正確に語ること。たとえば楢田はダエンという。オブジェ(対象)を正しく表現すること。④これらの遊具で、子どもは「秩序」「順序」の感覚をつかむ。ものごとにはすべて順序があるとということ。深さ、浅さ、高さ、低さ、その順序に従わなければ物の収まりがつかないことを体験によって知る。⑤くり返しなさい。そうすればきつとうまくいく。

モンテッソーリ方式で重要なのは、子どもの指先の感覚の錬磨であり、手首の筋肉の運動にある。豆を容器から容器へ移す運動

など。(この点、昔の日本のおはじき・お手玉・綾とり遊びは、そのままモンテッソーリ方式に適していた。)目と手と指の運動。字を指先で覚え、文字盤の色の違いから、物の差に気づいてゆく。すべて「リアルなことから抽象的な世界へ」、「量から象徴へ」という子どもの心の動きを見つめて、これらの遊具は生きてくる。

フレール方式ではおとぎ話を読んで聞かせてやる間に、幻想の世界から抽象の世界へと子どもを導いたのであったが、モンテッソーリでは即物的に、物から物へと感覚を走らせる中でアブストラクトな世界が浮んでくる仕掛けである。

#### スタンフォード大学・ピングナーリースクール

スタンフォード大学はアメリカの私立大学の中でも最も財団の基礎のしっかりとした贅沢な大学で、そのキャンパスの広大で裕福なことは知られているが、その附属幼稚園であるこのピングナーリースクールもまた広々とした三つの教室、それぞれの庭園の広々して、丘あり、谷あり豊かな自然環境をもつこと、まず狭小な日本から来た訪問者の度胆を抜く。

二歳半から五歳までの子ども、三十六人を一教室に収容して四

人ないし五人の教師が世話をする。

ミス・エーレンライヒが案内してくれて、ここはパークレイの附属と違って、自由に歩き廻ってよいし、写真をとってよいし、子どもに話しかけてもよいと大そう寛大であった。尤も自然環境、生活空間がケタ違いに大きいため、こせこせした人間の動きなど規制しなくとも、自然の広大さの中に吸収されてしまつて、気にならなくなるのである。子どもが庭の木に木登りしている。

そういうえばパークレイの附属でも庭の木の根っこに踏み台があつて登りやすいようにしてあつた。モンテッソーリも「木登り」を奨励し、子どもに大切な事の一つに数えている。(日本の幼稚園で木登りを奨励しているところがあるだろうか。みな事勿れ主義、安全第一主義で逃がっているのではないか。)庭の一部で、高い台から子どもに飛び降りをやらせ、その下のマットで Dengri 返しをする訓練をやっている。中年の男の人がつき添つて、事故のないよう面倒をみている。幼児にとつては勇氣と決断を要する大仕事らしく、緊張そのものの顔付きである。

「あの男の人は先生ですか」

「イエ、父兄です。ここでは父兄が協力して、保育を手伝うことがのできるのです」

わが国にもこのシステムは取り入れなければならない。しかし

文部省が何というか、また反対することだろう。

見学を切り上げてわれわれは一室でお茶とクッキーをよばれながら、園長のエヂス・ドウレイ博士の話を伺つた。この女史がまた仏様のような円満具足の相好で、慈眼にみちている。もつともこんな天国か極楽のような学園に暮していれば誰だつて人相も良くなるというものである。

問 この学校は設備もよく、豊富で、贅沢にできているが、物を与えすぎることになりませんか。

答 これ位の設備で物を与えすぎるとは思わない。同じ玩具がダブつては置いていない。カリフォルニアは四季の変化がなく、冬も雪がないので、子どもに想像力をもたせるよう工夫している。船・飛行機・電車・花々・色彩や、音響効果、走り方の設計にも工夫し、子どもが自由に振舞えて、馳けたり登ったり、発見したり、冒険したり、試したり、たとえここでは失敗しても構わないが、要するに子どもが幸せになれるための実験のくり返しのできる状況を作つておいてやるのです。

問 モンテッソーリについてどうお考えですか。

答 あれはオーエンみたいなものです。(ロバート・オーエンというのは、エンゲルスの書いた「空想から科学へ」の本に出て

くる人物で、結局、それは過去のものだという意味)その当時としてはあれで良かった。今はもう古くて、モンテッソーリだけではやっていけない。

問 モンテッソーリに代るものは誰ですか。

答 やはりピアジェでしょうね。それとローレンツ・コールベルク。とにかく子どもの情緒の發展を重視し、思いやりのある子どもにし、すべてに積極的に興味を抱き、意欲的になってくれることが大切です。現在三百人の子どもを収容していますが、なお五百人の子どもがリストに名前をのせて待っているのです。

私はこのドウレイ女史に感服した。ここの建物設備の立派さよりも、園長の学殖の深さに感服した。モンテッソーリをロバート・オーエンになぞらえて位置づけてしまうその見識に感した。やはり保育は保育者の人生観にかかってくる。倉橋先生の言われた通りである。保育する者の人生観、哲学、そして社会思想。これが最後には物を言う。この女史は社会科学も心得ており、エンゲルスが空想的社会主義者と規定したロバート・オーエンの名を引いて、モンテッソーリの位置づけを試みたのである。

#### ロスアンゼルス・リーグ託児所

これは私立の財団による託児所で零歳から二歳までの幼児を世話しているが、黒人の十代の未婚の母などが多く、その母親の教育も同時にしなければならないということであった。中西さんという日系青年が職員の一りで説明してくれたが、若いのに落着いた人で、静かで素朴な人柄が滲み出ている。こういう人がこの社会奉仕の仕事に献身しているのだと思うと感動を覚える。旧館の隣に新館が建築中で、この建築現場を案内してもらった。著名な設計家の手になるというこの託児所は、機能的にいくつもの房に分れ、四十種の色彩で染め分けられ、各部屋に日光が入り、そして幼児たちが健康に生育しつつ、理想的に教育されるという仕組みになっている。

#### サンタモニカ・太平洋公園児童館

これも私立だが二歳から五歳までと、五歳から十二歳までとの、大体片親の子どもを扱っている。今はサマースクールで数が少ないが、普通は九十人の子どもに十三人の教師、それに老人のヴォランティアとカリフォルニア大学の学生の助手が手伝う。こ

こは子どもだけでなく、家族ぐるみの面倒をみる。入る前にはソシアル・ワーカーや看護婦も立ち会って、身心ともに徹底的に検査する。

親は低所得者層で、精神的、経済的に危機に面しており、毎週水曜の夜に会合をもつて、相談にのり、苦勞を分かち合う。木曜には親と子とのバレーをやったり、週末にはキャンプに行ったりもする。十五人で一グループを作り、教師一人ついて、プログラムを立てる。とにかく家族的というよりは、各家族を團結させて人生を送れるように仕向けている。

カリフォルニア大学・教育学部・高西助教

以上の二つの施設は、実はカリフォルニア大学の教育学部とコネがあり、両者は協力して仕事をすすめ、大学の学生も手伝い、実習にゆき、密接な関係にある。この施設をわれわれに紹介して下さったのはルビー高西博士であった。

ルビー高西博士はハワイ生まれの日系三世で、スタンフォード大学で学位をえられ、現在カリフォルニア大学の助教で、アジア各国のカリキュラムの比較研究に取組んでいられる。来年、それに関する大きい本が出版される予定とのことであった。ルビー女

史はまだ三十前。一見して日本美人だが、アメリカ人と結婚して、大きな研究室をもって活躍している。日系人がこういう知的分野に進出しているのを見るのは頼もしい。私はバークレーの研究所のチン女史の言ったことを思い出した。「アメリカはおとな中心の社会で、子どもはつけたりですが、日本は子ども中心の社会で、子どもの教育には熱心すぎる位、熱心です」と。おそらく高西家もハワイで、子ども中心に暮し、ルビーさんの教育に力を入れたのであろう。それが成功して今や若くして助教の椅子を占めている。

広い演習室を使ってわれわれはルビーさんとの話を長時間もった。そして三時すぎムーア館（教育学部）の前のパチオ（中庭）で樹の蔭で、ジュースとクッキーでお茶の時間をもった。ルビーさんが家で焼いてきたというクッキーである。そこに教育学部の先生方も五、六名出てこられてわれわれの立ち話に参加された。すべてルビーさんの心尽しによるものである。

私はルビーさんとの対話の中で聞いた「アメリカにはもうフロンティアはなくなった」という言葉を印象にとどめた。もう開拓者精神は外部ではなく、内部に、内攻的にしか発揮できないのである。サンフランシスコでもロスでも、郊外に伸びた住宅街は、マツチ箱のような建売住宅や角栄団地にそっくりであり、しかもモ



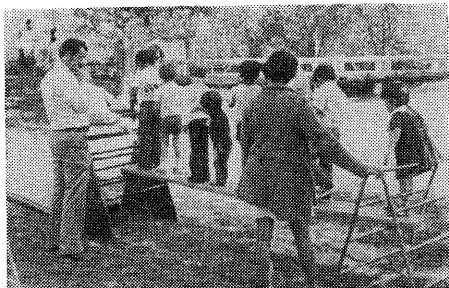
ルタルの四軒長屋までさへある。この現実には、アメリカの西部開拓劇が過去のものであり、太平洋をこえて日本に来て、沖縄に来て、ベトナムに来て、もはやアメリカの入りこむ余地はないのであり、アメリカは新しい次元に生きる外はないことを示すものである。もしそうなら、教育もまた今までと違った新しい型の人間を造らねばならず、アメリカがフロンティアを求めて発展をつづけた時代の哲学、プラグマチズムによるデュウイの教育論なども既に過去のものとなり、アメリカは教育システムを新しく作りかえなければならぬと言ったチン女史の言葉は正しい。アメリカで起った事は、十年して日本に伝わってくる。日本もまた新しい型の人間の教育を、戦後三十年にして、考え直さねばならない時に直面しているのである。



スタンフォード附属大学幼稚園



◀ アメリカの園児



▶ 順番に飛び下り